

定年俳句誌

6 2012年
月 号

かなた

ふ



黒羽集

(六)

佐藤喜仙

冬空に一朶の雲や水の苑

東風吹けど廻らぬ風車池の辺に

二ヶ月の風に耐えゐる釣師かな

へら釣の春引き寄する浮子沈む



春浅し風いたきなか鮒あがる

池の端の杭に冬の鶉動かざる

水かたき土手にほちほち土筆生う

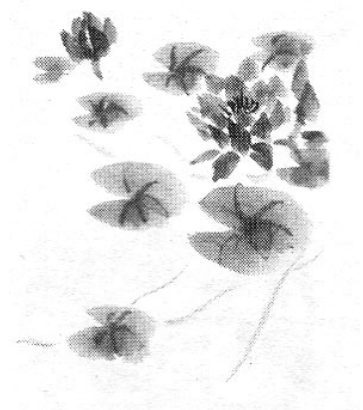
鉄橋も長き列車もかぎろへる

対岸のビルは霞に沈みをり

冬の川薄き光が流れ行く

かきね集

白選句集



花ざかり

松本周二

菜の花やサナトリウムは対岸に

岩の上の亀動ぜずやうららけし

夕桜見舞ひ帰りの街明かり

鳥の声遠く聞こゆる花曇

一湾の春灯つなぐ首飾り

三楹の花の法悦増上寺

艶話

川井素山

桜

菅原 孟

釣人の丸き背にさす春の色
大根の白首伸びる穀雨かな
妻をれば鮎でもつまむ花筏
両岸の枝重なりて花の傘
沈丁花匂ふ垣ごし立話
焚火かこむ海女の昼餉の艶話

花

安藤虎醉

肥桶

木島茶筌子

目黒川花を映せる鏡かな
葉櫻に山肌若くなりにつけり
咲くを待ち散れば惜まるる櫻かな
臥す妻に花を見せんと車椅子
花の時期終りて静か花は葉に
散りに散り散りて狭庭は花の海

喜寿を越ゆ吾も負ひし日ランドセル
花菂昭和を生きし者同志
つくし和袋回しの興増せり
寒蛭昔は低き台所
ふくらみをふくらみを待つ露の臺
肥桶をかつぐ遠き日卒業す

撫子集

主宰選



梅林に靄たちこめて白襖

小林美登里

御神火の大島航路風光る

春立つや曙光に映ゆる鬼瓦

芽柳やゆたに流るる雲一朵

枝といふ枝に万蕾月夜の梅

踏青や三重塔の遠く見へ

岡野安雅

囀りの音に起こさるる二日酔ひ

鏡台や母の好みし沈丁花

蜜蜂の花粉まみれのホバリング

春光や長袖のシャツたくしあげ

春疾風柁折りて立ち去りぬ

本郷宗祥

新人の集合写真花の昼

米田文彦

春嵐垂るる枝の揺れに揺れ

遠嶺や花咲きそむる庭の梅

車窓よりアルプスの嶺春夕焼

春光や輝き放つ白き嶺

花筏中州に着きて崩れけり
咲きこぼるる花海棠や細雨降る

夕闇にほのと明るき白木蓮

自転車将棋倒しに春疾風

急ぐとも先に淀あり花筏

小池清司

初音聞き身の軽くなる登山道

山本達人

浅酌に頬ほんのりと花の宴

濡れそぼつ釈迦牟尼の立つ灌仏会

草に寝て雲はろばると揚雲雀

能面に愁ひを刻む花篝

雪解けて畑に鉄鋤土香る

花散らしの雨がもたらす訃報かな

越後にもめぐり来たるや遅き春

椿園今日は目立たず花高し

田島昭久

溜池のかいぼり済みて小魚獲る

梅花散り彼岸桜の咲き続く

鷹化して鳩となるなり鳥騒ぐ

竹やぶの筍まもるネットかな



那須野集

主宰選



公園にシャボン玉追ふ見転びをり

青木英林

春の雨なれど細かく降りにけり

坂上じゅん

露天湯に浸り花見の時千両

うたた寝から目覚め気につく春の山

壺焼きの匂ひ流るる参詣路

図書館に舟をこぐひと春うらら

夕靄に浮かぶ小島の春灯

春雪の翌朝すずめ騒がしく

ポタポタと雫急くなり春の雪

潮騒や春全きの恩賜の苑

瘤多き木に白無垢のごと花咲きて

丸山酔宵子

大北風や人寄せつけぬ荒磯海

松本信子

雨上がり春暁浴びて深呼吸

北の地の復興祈るイースター

逞しき無骨な樹に咲く桜かな

満開の桜目にしむ二日酔ひ

垣仕立雪積むさまにこごめばな

萌葱色枇杷の新芽の天に伸び

揚雲雀かなたに聳ゆる浅間山

木漏れ日がたたみにうつり炉を塞ぐ

吉田啓悟

黒々と太き枝も見る花見かな

柳田皓一

空港の旅立つ人や風光る

咲き満ちて青空に映ゆる桜かな

土手つづくつづくはてまで花ざかり

大枝に添へ木もされて花溢る

うぐいすや哲学の径たもとほる

花盛りはや散り初むる一樹かな

すきまなく咲き満ちてをり山笑ふ

野や山も花の溢るる時となり

下萌えや日々に狭まるわが小庭

橋本修平

如月の空より雪や細格子

金田和代

花杏一本なれど庭栄ゆる

カツカツと靴音尖り春浅し

白木蓮つんと天指す蕾かな

下町には路地のしきたり春日傘

つまづきて眼前に咲く山堇

惚芽和山の風聞き酒を酌む

鈍色の空にとけ込むあやめ草

踏み切りの音は目覚まし春の夢

篝火に桜妖しや翳躍る

池内とほる

陵に嘯しげく訝かな

佐々木薫

万朶に咲く枝に小鳥や桜餅

ややありて春潮の河逆流す

花散るをはやめて過ぎる夜半の雨

音もなく日暮れの来たる春灯

白梅や法華経聞ゆる本門寺

三月や布団干す窓いたるところ

夕星や畝一列に葱坊主

春風や供花あふれたる辻地蔵

初孫の晴着を濡らす春時雨

後藤克彦

春霞あの世この世をへだてるごと

長島清山

春の山帯に流るる杉花粉

花まつり野菜売る店被災地の

花の宴銘酒掲げて友来る

花に酔ひ美談ばかりや四月馬鹿

鳥帰る灰色空に線を書き

春の雲日矢もれ後の通り雨

古き雛競ひ並ぶる日田の街

花めぐり古稀迎ふるも学成らず

点滴の針身のうちに春寒し

郡山真帆

山笑ふ峠から見る風景画

菊地崇之

大空をまろく舞ひゆく胡蝶かな

お花見で古酒ふるまはれ酔ひにけり

湾岸の高きビルより春の月

食べて旨し石焼芋と花菜漬

春の月被災地の空にもあらむ

門前の三色すみれ歩は軽し

浄域に梅の古木や風の路

寺の庭の薄暗き隅椿咲く

揚雲雀スカイツリーの高さまで

吉田博行

澄まし汁白魚の目の黒きかな

松岡利秋

故郷の里山匂ふ春の風

蜷の路開かずの門はなかりけり

うららかや川下りゆく舟一艘

人生に引き算もあり春臙

春の山薄ぼんやりと遠見かな

梅に遊ぶ当分濁世に留まらむ

春山の草木育む雨に濡れ

春雪や行く路たがへ別れ酒

撫子集・那須野集鑑賞 四月号より

客員 村上克哉

撫子集

人知れず遅れ咲きたる金縷梅かな 田島昭久

山などに雪が残っている二・三月の花がない時期に咲く高さ三米余りの日本固有の樹木、花は黄色、赤黄の四弁花で、葉が出るより先に開く。他の花にさきがけてまっさきに咲くが訛って「まんさく」と、紐が捻じれた形をして枝いっぱい咲くので「万年豊作」の満作に見立てその名がついたと言われる。今年の春は気温が低く余寒のなかに人知れず公園の隅に咲くのを見て、漸く春の到来を実感した。

スカイツリーその寒影の長きかな 小林美登里

東京スカイツリーは昨年一二月六三四米に達し、今年の五月開業を目指している。その偉容は都内の何処からも望むことが出来る。正三角形から次第に丸くなり三二〇米でほぼ真円となる。日本刀のゆるやかな反りの曲線を生かした日本の伝統建築の発想や、技術の粋を集めた姿は美しい。浅春のスカイツ

リーの景を寒影の長きかなとまとめ、計画から竣工迄の長い多くの労苦や、新しいシンボルの対する願いが込められている。

裸木の枝伸びやかに並木道 本郷宗祥

落ち葉を終え、まるで枯れたように見える銀杏並木道だろうか、裸木になると樹木の枝振りがよく見える。徒長枝を剪定して形を整える並木道もある、枝伸びやかに生き生きとして成長の良さが感ぜられて、気持もすっきりとする景。「伸びやかに」の表現がいい。

梅三分鼻近づけて車椅子 小池清司

春を告げる早春の冷たい空の中に、香り高い五弁の花を開く梅、薄紅、濃紅、八重もあるが梅と言えど白梅の凛とした風情が似合う。「東風吹かば匂いおこせよ梅の花、」有名な菅原道真の歌にもあるように匂いを主として賞翫される。車椅子のお年寄りが咲き初めた枝を引き寄せ、清々しい香りを愛でている静かな梅見の風情が伺える。(以下略)

伝言板

1 第六回本部句会 (原則第二金曜日)

①日時 2012年6月8日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室〔別添地図参照〕

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第七回本部句会

①日時 2012年7月13日(金)

14:00～17:00

その他事項は第六回と同じ

3 吟行 (2012年度吟行方針)

毎月同じ場所を吟行し、日本の四季の微妙な変化を認識する。なお今年度は吟行後の句会を行わない。

①第六回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2012年6月26日(火)

13:30～15:30位

②第七回吟行

日時 2012年7月24日(火)

13:30～15:30位

その他事項は第六回と同じ

場所 新宿御苑
集合 新宿御苑正門前
入場料 各自負担 200円



4 「かさね」友の会の皆さん
「かさね」那須野会員米田文彦さんが

「かさね」の親誌「笹」で四月より同人に推挙されましたので「かさね」におきましても期中ではありませんが、特例として「撫子同人」に六月度より推挙いたします。

「かさね」主宰 佐藤喜仙

会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 四百円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-15

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を『表季語』と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜

芭蕉

三段切でも可

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。